

港南区地域子育て支援拠点事業 5か年のまとめ 実施概要

対象事業	港南区地域子育て支援拠点事業
対象期間	平成29年度～令和3年度(5か年)
事業の実施者	特定非営利活動法人ちゅーりっぷ
	港南区こども家庭支援課
実施目的	<p>1 今期5か年の事業を振り返り、成果や課題、今後の方向性などを整理します。</p> <p>2 市民協働事業の実践を通じて経験を蓄積し、その後の市民協働や市民協働事業に活かしていくため、また、当該協働事業の当事者だけでなく、多くの市民等の協働への参加意欲を高めるため、当該評価を公開し、透明性を高めます。</p>
実施時期	令和3年9月
実施について	<p>拠点事業は、区と運営法人との協働により進めています。</p> <p>毎年度、事業ごとに定めている「目指す拠点の姿」に沿って役割分担し、行動計画を立て、年度末には「振り返りの視点」に沿って取組の振り返りを行いながら事業を進めてきました。また、中間期には「有識者を交えた事業評価」を実施し、事業の運営・管理にフィードバックして拠点運営状況の向上を図っています。</p> <p>今回は、中間期に行った「有識者を交えた事業評価」にその後の事業振り返りを加え、今期5か年のまとめとしました。</p>
	<p>【参考】 拠点の7事業</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 乳幼児の遊びと育ちの場及びその養育者の交流の場の提供(親子の居場所事業) 2 子育てに関する相談及び関係機関との連携に関すること(子育て相談事業) 3 子育てに関する情報の収集及び提供に関すること(情報収集・提供事業) 4 子育てに関する支援活動を行う者同士の連携に関すること(ネットワーク事業) 5 子育てに関する支援活動を行う者の育成、支援に関すること(人材育成、活動支援事業) 6 地域の住民同士で子どもを預け、預かる支え合いの促進に関すること (横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業) 7 子育て家庭のニーズに応じた施設・事業等の利用の支援に関すること(利用者支援事業)

1 親子の居場所事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・イベントを実施するにあたり、拠点で行うことの必要性や目的について、区と一緒に考えながら協力して実施していく。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	A
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		A	A
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

- ・H30年度乳幼児健診アンケート(区実施)
 拠点の認知度:90% ⇒認知している方の利用率:54%
 はっちではほっとしたり安心して過ごせますか?⇒そう思う54% 思わない5%
- ・利用実績

	利用組数(組)		利用人数 (人/年)	利用者 親等 内訳 (人/年)							新規登録者(人/年)	
	年間	1日平均		父	母	祖父	祖母	プレパパ	プレママ	その他	総数	プレパパ・ママ
H28年度	13,064	54.4	26,053	728	11,811	22	109	48	106	240	919	46
H29年度	11,627	48.9	23,839	585	10,553	23	105	83	123	205	801	79
H30年度	11,146	46.6	23,455	591	10,111	11	89	64	119	161	858	60
R1年度	9,268	42.9	19,251	530	8,332	4	98	64	96	225	704	69
R2年度	8,416	41.8	17,218	699	7,390	0	46	67	101	116	543	72

1. 利用者を温かく迎え入れる雰囲気づくり

- ・利用者を笑顔で迎え入れ、利用者の立場に立った適切な対応と言葉かけをするように心掛けた。
- ・お手伝いが必要とスタッフが感じた場合(多胎児や兄弟児など)には、利用者へ声かけをしサポートをした。状況に応じてスタッフ配置にも工夫をした。
- ・単独での来館に不安を感じる初利用者などが安心して来館できる工夫として、「はじめてさんの日」を開催した。
- ・上記イベントを行ったことで、継続利用につながった。(H30年度:新規登録者の16%(140人)が参加。参加後、82%(115人)の方が継続利用)
- ・毎日の反省会やスタッフ定例会で利用者への対応について共有、確認を行った。利用者への対応が統一でき、スタッフのスキルアップにつながった。
- ・緊急事態宣言の休館中、利用できなくても近所を通りかかったら見てもらえるよう玄関にメッセージをだめた掲示をした。
- ・緊急事態宣言の休館中でも自宅で親子が楽しめるように、Facebookから童謡やピアノ演奏などの動画配信を行った。
- ・再開後はコロナ禍に気持ちが落ち込んでいる利用者へ向けて丁寧な対応に加えて心が和むよう館内の装飾に工夫をした。
- ・新型コロナウイルス感染拡大防止のための対策を職員で話し合い、換気・消毒・三密を避ける運営に徹した。
- ・研修室も開放し人気イベントは空いている昼時間帯に実施するなど、入館人数の限度があってもより多くの来所者が安全に利用できるよう工夫をした。
- ・キッズコーナー・キッチン・おもちゃ棚を配置してつかまり立ちの乳幼児が遊びながら発達する環境づくりをした。
- ・沐浴が落選したプレママ・プレパパには資料を送付し個別対応をして出産に備えてもらった。

2. 幅広い利用者受け入れのための工夫

- ・来館のきっかけや仲間作りにつながるようテーマを決めて話せる場や交流できる企画を行った。
- ・テーマ別のイベントを実施することで、普段は交流のない利用者同士も熱心に情報交換し仲間作りのきっかけとなった。
- ・父親も参加しやすく家族で参加できる企画を行い父親同士の交流の場となった。父と子のみでの来館する姿も多くみられるようになった。
- ・プレママ・プレパパを対象とする企画し妊娠期から拠点を利用するきっかけを作り、出産後も継続的利用につながるようイベント内容を工夫した。
- ・コロナが怖くて家から出かけられない人にはオンラインでつながり気軽に話せる機会を提供した。

3. 利用者のニーズの把握

- ・利用者との日々の会話や相談からニーズや意見を把握し、ひろばの環境整備、事業や講座等に活かしている。
- ・初利用者には簡単なアンケートを実施し、居場所の雰囲気やスタッフの対応などを確認した。自由記述の内容は定例会で共有し運営に役立てた。
- ・利用者アンケート(H30年12月:来館者200名)を実施し、結果についてスタッフ間で共有し運営に活かしている。
- ・コロナ禍の飲食中止や館内の感染防止対策についてもアンケートで利用者の意向を聞きながら安全なひろば運営に生かした。

4. 親育ち子育ての場

- ・親同士が子ども同士の関係づくりを見守る意識を持てるよう声かけを行い、他の親やスタッフの関わりや講座等を通して子どもへの対応を学べる機会を作った。
- ・必要に応じてスタッフが親子に寄り添い見本となったり助言をすることで、親が子育てに自信や喜びを持てるという声が聞かれた。
- ・同じ悩みを持つ親同士が互いに情報交換・共有できるようスタッフが仲介をした。特に多くの親が悩み内容については講座を行い解決に導く工夫をした。
- ・子どもの年齢や親の状況に合わせた企画を行うことで、親育ちの場、子どもの育ちあう場になった。
- ・はっちの砂場や公園あそびを通じてスタッフから外遊びの方法や安全な遊び方を学び、初めて公園に出かけられた親子が多くなった。
- ・拠点を利用していなかった親子が公園あそび参加後に拠点を訪れるきっかけとなった。
- ・子どもの自然体験(野菜・花の栽培)や感触あそびなどコロナ禍でも三密を避けながら親子体験できる機会を提供した。
- ・子どもが遊びに集中できるよう、体を使う遊びは2階にしたり、コーナーでおもちゃを分ける配置を工夫した。
- ・区内にあるケアプラザ(9ヶ所)の協力を得て出張はっちを開催し、遠く普段拠点を利用しない親子にも拠点の雰囲気を体験してもらった。

評価の理由(区)

- ・既存及び新規事業について、目的・内容・評価について精査。また、実施結果についての振り返りを定例会内で行うよう心がけ、より区民ニーズにあった内容となる様、拠点と共に考え、修正した。
- ・育児不安の強いケースについては、拠点に同行する等利用に繋げるための支援を実施。必要に応じて、相談連絡票を用いる等、切れ目のない関わりができた。
- ・区が実施する業務で把握した子育て中の親子のニーズ等を、拠点のスタッフ定例会等を通して共有することで、拠点の事業内容の発展に繋げることができた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・初利用者向けイベントを開催することで、「安心して来館できた」という声が聞かれた。来館の良いきっかけとなっていて、安心感から継続利用につながっている。
- ・コロナ禍でも、感染症対策を踏まえた工夫を行うことで、イベントの開催等を実施し多くの方が利用できるよう取り組めた。
- ・プレママ・プレパパが参加できるイベントを工夫することで、コロナ禍においても例年より多くの方に利用して頂いた。
- ・沐浴体験で、出産後に赤ちゃんとともにゲスト参加を促す企画を盛り込んだことで、実際に出産後早期の利用につながり、継続利用もみられた。また、出産前にふれあいの時間を作ることで、出産後の拠点利用のイメージが持て、親育ちの場になった。
- ・出張はっち(地域ケアプラザや公園等)を地域役員(主任児童員等)の協力を得ながら開催し、様々なエリアの方々に参加しやすいよう、アウトリーチ活動に取り組めた。

(課題)

- ・安心して子育てに臨めるよう、妊娠期から拠点を活用して頂くために、産婦人科医療機関等と連携をした拠点の周知活動や、母子コーディネーターと課題共有・連携することで、参加しやすいイベント開催に向けた取組が必要である。
- ・様々な方が利用しやすいよう、掲示物の工夫や遊具等の配置に気を付けた環境作り、アウトリーチ活動も含めた居場所提供に、より一層取り組んでいく必要がある。

振り返りの視点

- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区子ども家庭支援課や関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気づき、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	<ul style="list-style-type: none"> ・区は拠点の相談対応者が的確な対応ができるように、拠点での個別相談内容をより丁寧に聞き取るように努める。 ・利用者支援事業と連携して、拠点内で継続的な学び合いができるよう促していく。 ・相談事業の実施について、拠点内の掲示等で広く利用者に周知していく。 	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができている。		B	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)
 ・H30年度利用者アンケート(拠点実施)・乳幼児健診アンケート(区実施)
 問: スタッフに相談できる事を知っていますか? →知っている91%(拠点実施) (H27年度拠点実施: 知っている67%)
 問: 子育ての相談をしやすい雰囲気ですか? →そう思う 89%(拠点実施)61%(区実施) R1年83% R2年92%
 そう思わない 1%(拠点実施) 3%(区実施)

・相談件数

	スタッフ相談			赤ちゃん相談 (助産師)	保育教育 コンシェルジュ相談
	相談人数	相談件数	相談の多い項目		
H28年度	1,405	1,521	子どもの生活: 36% 就園・就学: 12% 子どもの健康: 15%	62	83
H29年度	1,253	1,516	子どもの生活: 36% 就園・就学: 16% 子どもの健康: 12%	55	94
H30年度	1,273	1,517	子どもの生活: 42% 就園・就学: 16% 子どもの健康: 12%	60	101
R1年度	915	726	子どもの生活: 35% 就園・就学: 15% 子どもの健康: 11%	44	76
R2年度	1,431	1,661	子どもの生活: 30% 就園・就学: 14% 親自身: 11%	32	31

1. 安心して相談ができる場の工夫

- ・広場での様子を見守り、日常の会話から、今困っていることなどが、気軽に相談できるような関わりを心掛けた。
- ・相談は傾聴・受容・共感を基本に、一人一人に寄り添う対応を心がけ信頼関係を築いた。
- ・同じ悩みをもつ養育者同士で話し合えるように、スタッフが仲介した。
- ・プライバシーにも配慮し安心して相談できる場があることを伝え、個室での相談も行った。
- ・安心してゆっくりと相談ができるように必要に応じて子どもを他のスタッフが見守るなどの配慮をした。
- ・食事やおむつはずれなど相談の多い内容については、講座を行うことで一度に多くの人に聞いてもらうことができた。
- ・毎日の反省会やスタッフ定例会で、相談対応について報告・共有し、スタッフが誰でも相談を受けられる体制を構築した。
- ・スーパーバイザーによる研修で特に心配な親子の対応方法についてアドバイスを受けスタッフのスキルアップを図った。
- ・必要に応じて相談内容や親子の様子を記録に残してスタッフ間で共有し、次回以降にも適切な対応ができるように心掛けた。
- ・感染が心配でやっと家から出てくれた利用者には特に丁寧に話を聴き、今後のフォローへつなげた。
- ・気軽なおしゃべり会などで利用者の子育てで知りたいことなどを利用者同士で話せる場を設けた。
- ・出産から一人で子育てをしていた利用者が涙を流すことが多かったため、スタッフが寄り添う姿勢で対応をした。
- ・父親からの子育て相談が増えてきているので、いつでも気軽に相談できる体制を心がけた。
- ・特に相談が多い内容「トイレトレーニング」「幼稚園・保育所」についてはコロナ禍のためオンライン講座を実施して対応した。
- ・助産師・臨床心理士・保育教育コンシェルジュの専門相談も定期的に開催し個別相談ができる場を作った。

2. 適切なつなぎとフォロー

- ・相談のニーズに対応するため、専門相談(公認心理師・助産師・保育士等)につなぎ、他機関の情報提供をした。
- ・必要に応じて、子育てパートナーと情報共有し、区や関連機関につなぎ、その後も継続的に寄り添い見守った。
- ・相談後の経過について把握が必要な利用者の相談内容を記録し、スタッフ定例会等で共有した。
- ・コロナ禍での心配な利用者の把握として「ひろば連絡表」に起票して、安心な姿を確認するまでスタッフで共有した。
- ・長期に継続してフォローが必要な案件はパートナーへつないだ。

評価の理由(区)

- ・区との定例会などでひろば相談の様子や相談内容について振り返りを行い、必要時助言することで、今後のよりよい対応方法について共有することができた。
- ・相談体制について、養育者が相談しやすいか等の状況確認を定例会にて行い、ひろばスタッフのスキルアップや体制づくりに向けて拠点と検討することができた。
- ・ひろばスタッフのスキルアップに向けて、拠点スタッフ等に向け、ペアレントトレーニング等の勉強会を開催した。
- ・専門的な対応が必要な利用者に対して、個別の相談や対応の助言、区の担当職員へ引き継ぎ等をする中で、継続的な支援に繋がっていった。
- ・拠点スタッフが安心して相談を受けることができるように、スタッフ定例会の機会を活用し区職員と顔の見える関係づくりに努めた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・拠点で相談ができる事について認知度の向上、拠点スタッフの相談しやすい雰囲気づくりが、相談人数・件数の上昇につながったと考えられる。
- ・身近な相談に丁寧に対応する積み重ねが、育児支援につながっている。
- ・スーパーバイザーよりスタッフの相談の対応についてアドバイスを受け、スキルアップにつながった。
- ・講座等を通じて、悩みや不安が軽減されるだけでなく、利用者同士が共感したり、話せるきっかけにもなった。
- ・相談ニーズとして高い保育園情報について、センター園保育士と協力し、オンラインで保育園生活がわかる講座を実施した。

(課題)

- ・スタッフ定例会等で相談内容について検討や研修や勉強会等を通して、スタッフ同士が学び合い日々の対応をよりよいものにしていくことが必要。
- ・区に対して緊急で相談が必要な案件の判断が、施設長がいなくてもでき、施設長以外でも区に相談できる仕組みを作っていくことが必要。

様式1ー2 地域子育て支援拠点事業評価シート

振り返りの視点

ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。

イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。

ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。

エ 区子ども家庭支援課との連携のもと、各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。

オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、区子ども家庭支援課と相談しながら適切に対応しているか。

カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・拠点に来ることが難しい親子へも情報が届くような発信方法を検討していく必要がある。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。	・拠点が情報収集・発信の場でもあることについて、更に認知度を高めていくために、周知の方法を見直す。	B	A
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。	・こうなんまっぷっぷを、より使いやすく見やすいものにする。また拠点ホームページの更なる充実を図るなど、区民に対する子育て情報の発信方法と内容について改善していく。	A	A
評価の理由(法人)			
<p>(主なデータ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H30年度利用者アンケート(拠点実施)・乳幼児健診アンケート(区実施) 問:はっちの情報コーナーで子育てに関する情報を得ることができましたか? そう思う91% 思わない1%(拠点実施) 問:はっちのひろば内掲示、ホームページ、広報誌は子育てに関する情報が充実していると思いますか? そう思う70% 思わない2%(区実施) ・情報は探しやすいですか? そう思う R1年86% R2年77% ・はっちからのラブレター(※拠点の通信)の設置場所:区役所、地域ケアプラザ、地区センター、コミュニティハウス、図書館、小児科・産婦人科医院や病院、百貨店・スーパー、地域のひろばサロンなど(82か所)→144か所(R3年)幼稚園・保育園・連絡会・地区社協 ・R2年 ひまわりマップ 持っている82% 活用したことがある72% 			
<p>1. 子育て情報の集約と提供</p> <ul style="list-style-type: none"> ・養育者が必要としている情報(感染症予防・防災情報など)を、「はっちからのラブレター」に新たに載せ、さらに多くの施設等でも入手できるように配架してもらえよう依頼した。 ・情報の掲示板についてニーズの高い情報は受付横の見やすい場所に設置し、ひとり親・DV・外国籍情報は手に取りやすい場所を考慮して設置した。 ・虐待・DVやひとり親などの情報の設置場所はトイレ内の掲示物で知らせ、利用者がスタッフに聞かなくても容易に取得できるようにした。 ・常時、情報コーナーの整理を行いどのような情報があるのかを把握し、利用者の希望に応じ提供できるようにした。 ・拠点に来られない方のために、区の広報や拠点のホームページ・ブログ・Facebook・ピアッツァを通じて情報が得られるようにした。 ・拠点の機能だけでなく、親と子のつどいの広場や港南区親子の居場所、区の相談事業についてまとめたミニチラシを作成した。複数の配布物が簡素化され情報の整理がしやすくなった。ポケットサイズのため保管や持ち運びが便利になった。 ・幼稚園・保育園についての情報提供の要望が多いため、幼稚園や保育教育コンシェルジュの協力を得て、入園前に知りたい情報を聞くことができる講座を実施し、多くの利用者に情報提供できた。 ・コロナ禍では講座をオンライン講座にして、密にならずに大勢の人に参加してもらえよう工夫をした。 			
<p>2. 区民への周知</p> <ul style="list-style-type: none"> ・区の協力を得て、母子手帳交付時やこんにちは赤ちゃん訪問時に拠点についての情報を提供した。 ・両親教室や赤ちゃん教室、1歳6か月健診に向向き、拠点の機能について周知を行った。 ・こうなんこどもゆめワールド(※)に参加し、拠点の機能のPRを行った。 (※実行委員会主催で年1回開催。区内全域より参加がある子ども向けのイベント) ・孫育て講座やはっち祭の周知に関して、新聞折り込み等の地域情報誌を活用し、普段拠点の情報が目に届きにくい年齢層にも届くよう周知した。 ・子育て情報お役立ちファイルにまとめ、区役所、地域ケアプラザ等の公共施設や地域のひろばサロン等に設置し、情報提供した。 			
<p>3. 養育者や担い手の関わり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育て支援関係者、幼稚園、地域の子育てサークル等から依頼を受け、チラシ等を掲示・配布した。 ・拠点が企画・編集の中心となり、ママリポーターと協働して、子育てガイドブックを作成し、更新の作業を行った。 ・子育て支援関連団体から情報を得て、はっちの新しいホームページ(スマホ対応)で港南区子育て連絡会の紹介や子育て情報カレンダーで各団体の情報を公開した。 ・利用者同士の情報交換のツールとして、つぶやきボード(H31年4月~)をひろばに設置した。(感染防止のため一旦撤去) ・養育者の活動で子育て家庭へ周知したい案件の相談があった場合には内容を確認し必要に応じて掲示などの協力を行った。 			
評価の理由(区)			
<ul style="list-style-type: none"> ・情報の集約・提供の方法について拠点と検討し、養育者に必要な情報が届けられるよう助言した。 ・養育者だけでなく、担い手が必要としている地域情報についても、収集・提供方法について、拠点と検討していった。 ・「はっちからのラブレター」の記事内容について、でブラッシュアップした内容になるよう助言した。 ・HPのデザインについて、拠点と共有することで、情報がより届きやすい形に修正していくことができた。 ・子育てガイドブック「ひまわり まっぷ」作成にあたり、養育者・子育て支援に関わる担い手の方々を中心となって実施できるよう、サポートしていくことができた。 			

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・拠点の機能及び親と子のつどいの広場や親子の居場所、区の相談事業の情報を1枚にまとめたミニチラシ作成した。今まで事業ごとに別々のチラシを配布していたが、情報をまとめたことで、伝える側も受け取る側もわかりやすくなった。
- ・現在子育て中であるママリポーターの協力のもと、子育てガイドブックを作成した。現地に赴き収集した情報をもとに、掲載内容や構成等を一緒に考えたことで、養育者目線の情報誌にすることができた。
- ・SNS(Facebook, piazza)やホームページなど、様々なツールを使い、拠点のイベントや地域子育て情報について発信ができた。

(課題)

- ・子育て情報を広く、タイムリーに届けられるよう、区と拠点の持っている情報を結びつける工夫が必要。
- ・地域の子育て情報が、拠点に集約されるよう、子育てに支援関係者間での「地域子育てカレンダー」の共有化を図る。
- ・より受け手に届きやすい情報発信ツールについて、引き続き検討を進めていく必要がある。
- ・拠点の居場所以外の機能も知ってもらえるよう、更なる周知方法の検討が必要である。

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ さまざまな子育て支援の場に向いて収集した具体的な情報や、関係機関及びネットワークを通じて得た情報を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 拠点の情報収集・提供機能を幅広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	<ul style="list-style-type: none"> 各幼稚園に子育て連絡会の活動への理解を深めてもらい、会員または賛助会員として誘致していく。 拠点の中でボランティアとして子育て支援に関わっている人を、身近な地域の活動へつないでいく。 	A	B
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。	<ul style="list-style-type: none"> 地域の各団体と、互いの強みを活かした取り組みを検討するなど、より密な連携、ネットワークの推進をし、地域とのつながりを深めていく。 	A	A
評価の理由(法人)			
<p>(主なデータ)</p> <p>【H30年度実績】</p> <ul style="list-style-type: none"> 港南区子育て連絡会:全体会(年4回・延べ147名参加)・推進委員会(年6回:推進委員24名)の開催 港南区子育て連絡会会員数:50団体 賛助会員数:19団体 子育て支援関係者の拠点来館数:延べ885名 はっち祭:来場者数1,051名、参加協力団体数17団体 百貨店での出張はっち数(年3回) 港南区子育て連絡会と共催の研修会(年1回:33名参加)『まち保育のススメ』地域で子どもを育てる(講師:横浜市立大学三輪律江氏) 子育てひろば・サロンを運営する方々の交流会(年1回:4団体4名参加) <p>【R2年度実績】</p> <p>コロナ禍のため港南区の子育て関係者におけるオンライン習得のための講座</p> <ol style="list-style-type: none"> 交流会12月8日 初めてのオンラインに挑戦「地域で見守る他孫育て」樺田明子氏 研修会1月12日 港南区子育て連絡会共催 オンライン映画鑑賞会「私のヒーロー」佐藤陽子氏 講演会2月28日 港南区役所・港南区社会福祉協議会後援 おうちでのしく！からだをつかったあそび 小山哲央氏 			
<p>1. 地域の子育て支援活動のネットワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> 子育ての居場所「あぶつが」と合同の定例会を隔月(年6回)で行い、うち3回は親と子のつどいの広場とも合同で行い、互いの活動や親子支援について情報共有を行った。 コロナ禍でもつながれるようオンラインで4施設会議を拠点主催で実施した。 子育てがひろばに外向ききっかけづくりとしてキャンペーンを4施設で実施し利用につなげた。 港南区子育て連絡会(※1)では事務局を担い、連絡会の各種会議の準備や会員間の連絡調整等を行い、会の活動が円滑に行えるようにサポートした。 (※1)港南区子育て連絡会は、幼稚園・保育園・民生委員児童委員・主任児童委員・子育て支援のNPO・行政など、58団体のネットワークで「子育てにやさしいまち港南区」を目指して活動している。 子育て支援関係者が連絡会の会員としてともに活動できるように、働きかけを行った。 港南区子育て連絡会と共催で子育て支援関係者向けの研修会を行った。 子育てひろば・サロンを運営する方々の交流会を開催し、日頃の困りごとなどを共有できる場を設け、情報交換を行った。 拠点が中心となってオンラインで交流会・研修会・講演会を実施し、連絡会会員のスキルアップにつながった。 地域の特性やエリアの課題について身近な支援者同士がお互いに協力連携しながら課題解決に向けて取り組めるよう、エリア別連絡会の準備を区とともにすすめた。 拠点で行っている感染対策方法を主任児童委員・国際交流協会・ケアプラザなどにアドバイスした。 <p>2. 拠点利用者を地域へつなぐ</p> <ul style="list-style-type: none"> 港南スポーツセンターの協力で開催したはっち祭(※2)では、居場所や親と子のつどいの広場、市立保育園のほか、地域の町内会のシニア部や区民活動グループに催事の協力を依頼し参加につながった。はっち祭に来場した方々に協力団体を知ってもらうきっかけとなり親子との交流の場となった。 (※2)港南スポーツセンターまつりと共催で行っている乳幼児向けのお祭り。H30年は8回目。 「あそびにおいでよ子どもフェスティバル春、秋、冬(※3)」では、実行委員会から出席し、コーナー参加した。拠点利用者へのイベントの周知や、地域につなげる橋渡しの役割をした。 (※3)区内を3エリアに分け実行委員会主催で開催される乳幼児向けのイベント コロナ禍で多くのイベントが中止となったが日野中央公園と共催でチューリップの球根植えを実施し、親子を外遊びへ誘致した。 親と子のつどいの広場や地域ケアプラザ、子育てサークルに周知や参加の協力を得て出張はっちを実施した。 はっちの子育て情報カレンダーでは掲載にあたり関係者と連携して居場所情報検索ができるページを作成したことで拠点利用者を地域につなげる役割を担った。 <p>3. 近隣企業の協力</p> <ul style="list-style-type: none"> 百貨店の協力を得て、店内で出張はっちを開催し、普段拠点を利用しない方にも拠点機能を提供できるようにした。 「ひろばに行こうキャンペーン」では百貨店・コンビニ・スーパー・ドラッグストアなどの近隣企業にもポスター掲示の協力をしてもらえた。 			
評価の理由(区)			
<ul style="list-style-type: none"> 合同定例会の場を活用し、拠点と「親子の居場所」「親と子のつどいの広場」のあり方について、共に振り返り、ネットワーク機能を発揮できるよう助言等に努めた。 拠点と地域の子育てひろば・サロンを運営する方々との交流会開催に向け、助言・協力をしていた。 エリア毎の子育て情報の収集・提供方法について、拠点とともに検討した。養育者に身近な地域情報を届けることが、地域と繋がるためには重要であることを、意識づけできるよう助言した。 より身近なエリアでのネットワークが形成され、子育て支援の現状・課題の共有ができるようエリア別「子育て連絡会」の開催に向けて、拠点が中心となってサポートできるよう後方支援を行った。 			

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・出張はっちを行う際に、親と子のつどいの広場や地域ケアプラザ、子育てサークル、主任児童委員等の協力を得て開催した。当日参加した拠点スタッフと協力団体等の方々と顔の見える関係ができ、拠点利用者を地域につなげる際の強みとなっている。

・子育て情報カレンダーの作成をとおして、子育て支援関係者と顔の見える関係作りに発展している。

(課題)

・子育てひろば・サロンを運営する方々の交流会の開催にあたり、内容についての検討が必要である。

・「あそびにおいてよこどもフェスティバル春・秋・冬」が開催されなくなったことで、保育園と連携する場面が減ったため、別の方法で連携をとる工夫が必要である。

・「子育て連絡会」に参加するメンバーが、子育て連絡会の活動目的を共有しながら、より主体的に必要な取組について意見交換できるように支援していく必要がある。

・エリア別の「子育て連絡会」を通して、より身近な地域でのネットワーク作りの充実を図っていく必要がある。

振り返りの視点

ア 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、連携促進に取り組んでいるか。

イ 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。

ウ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。

エ 養育者を身近な地域の子育て支援の場につなげているか。

オ 子育て支援活動に関心のある方を丁寧に受け止め、必要に応じて身近な地域の活動へつないでいるか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	・区内全域で、より子育てを温かく見守る風土づくりを目指していく。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		A	A
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		B	A
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	A
評価の理由(法人)			
<p>(主なデータ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はっちサポート隊の活動(H30年度) ちくちくタイム(手芸)8回延べ50名参加(うち地域ボランティア延べ10名) おりがみ2回延べ13名参加 座談会1回4名参加 ・はっちボランティア(H30年度) 登録数31名(内訳:地域20名、大学5名、専門学校1名、高校3名、中学2名) うち新規登録7名 活動数:地域ボランティア延べ74回・学生ボランティア延べ11回(大学生2回・中学生9回) ・夏休み中学生1dayボランティア体験(H30年度:8/1~25の間)参加数10名・延べ12回 ・港南区子育て連絡会と共催の研修会(年1回:33名参加)『まち保育のスズメ』地域で子どもを育てる(講師:横浜市立大学三輪律江氏)【前述:ネットワーク】 ・子育てひろば・サロンを運営する方々の交流会(年1回:4団体4名参加)【前述:ネットワーク】 ・子育てグループ交流会(年1回)H30年度参加団体5団体、参加人数12組/26名 ・子育てを支援する方向向けの研修会(年1回) ・近隣小学校の拠点での学習「吉原小学校6年生と親子のふれあい授業」(年1回:H30年度は3クラス113名・実施7年目) ・妊娠前から参加できる講座 H30年度まで沐浴体験:年6回(参加数:12組程度/回)・プレママ対象の講座:年2回(参加数:5~7名/回)を開催 R1年度より毎月第3土曜日に「プレママ・プレパパうえるかむでい」を開催 [R1年7月現在]沐浴体験2回(参加数:12組程度/回)、背守り刺繍:1回(参加数:3組)、体を動かそう:1回(参加数:2組)・夏休み中学生ボランティア R1年5校17名参加 R2年5校16名参加 ・R2年 在宅ボランティアで背守り刺繍 新規の0歳親子にプレゼントを開始した。 <hr/> <p>1. 地域の担い手を支える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育てひろば・サロンを運営する方々の交流会を行い、日頃の困りごとなどを話せる場を設け、情報共有を行った。 ・コロナ禍ではひろばやサロン運営者へオンラインで交流会ができるようZOOMの使い方講座を開催した。 ・子育てを支援する方向向けに、港南区子育て連絡会と共催で子育て支援に役立つ内容の研修会を行った。 ・子育て関係者へ今どきの子育て家庭の現状を知る映画鑑賞をZOOM研修会として実施して父親育児の理解につなげた。 ・孫育て講座を実施し、祖父母世代に今と昔の子育ての違いについて理解を深める場を作った。 ・地域の担い手からの要望で地域に出向き、遊びの提供や情報共有したことで、担い手は活動のヒント等を得られ、活動意欲の向上につながった。 ・コロナ感染予防の方法を地域の子育て支援者から質問があり、拠点で行っている安全対策を助言した。 <p>2. 地域の子育て支援活動への参加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・はっちサポート隊(ちくちくタイム・工作など)の活動や、はっちママのおしゃべりタイムで先輩ママとして話をするなどのボランティア活動を通して、達成感が得られたり、子育てに自信が持てるようになった。過去に活動に参加していた養育者が拠点のスタッフとして活躍している。 ・コロナ禍で活動辞退が増えたはっちボランティアを再編し、当事者の活動や在宅活動の活動も新たに加えた。 ・子育てガイドブックの作成にあたり、マリポーターが現地に赴き、情報収集してもらったことで、養育者が地域に関心を持てるようになった。 ・幼稚園・保育園児がいる母親に、入園時期にちよこっつボランティアをしてもらうことで、入園を希望している母親の良きアドバイザーになった。 ・母親の利用者を通じて働きかけを行うことで、父親が自然とパパボランティアとして参加できるようになった。 ・パパボランティアの中には、拠点での活動だけでなく、地域や市域でのパパ講座を担当するなど、活動の幅を広げている。 <p>3. 子育て家庭を見守る地域全体での雰囲気づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアが活動を重ねていくことで、子育て家庭への関心が強くなり、活動の幅を広げていった。 ・地域の町内会や区民活動グループが拠点との交流を通して、子育て家庭を理解し、温かく見守れる雰囲気づくりができた。 ・近隣の連合町内会の会議に参加し、子育ての現状や地域で見守ることの大切さを伝えた。 ・港南区子育て連絡会と実施したフォーラムでは地域の町内会の人たちが参加し、子育ての現状を知らせることができた。 <p>4. 次世代の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学生になった利用者が、自主的にひろばで絵本の読み聞かせや、ダンスを踊る際の手本となってくれた。 ・近隣の小学校の6年生全クラスを拠点に迎え、赤ちゃんふれあい授業を実施した。親子とのふれあいを通して、子育てや養育者の気持ちを学べる授業を行った。 ・夏休み中学生1dayボランティア体験の実施に向け、区内全校に周知をし、活動希望者を受け入れた。乳幼児の頃ははっちを利用していた中学生も訪れ成長した姿を見せてくれた。 ・中学生の職業体験や看護専門学校や大学生の実習を受け入れ、拠点の役割やひろばでの親子とのふれあいから子育てについての理解を深めてもらった。 ・妊娠前から参加できる講座を第3土曜日に開催。パートナーと参加しやすくなり、子育て家庭と交流できる場となった。 			

様式1-5 地域子育て支援拠点事業評価シート

評価の理由(区)

- ・地域の子育てひろば・サロン等の地域の子育て支援者との連携やスキルアップのための交流会・勉強会のあり方について共に検討した。
- ・区内の子育てサークル活動支援のあり方を拠点と共に検討し、既存のサークル活動が継続できるよう支援したり、新規立ち上げを目指して支援した。
- ・子育てグループについて、今後の支援のあり方を拠点と共に検討し、直接話し合える場の調整をしていった(COVID-19の影響で結果未実施)。
- ・拠点「子育ての居場所」・「親と子の集いのひろば」のスタッフに対して、スキルアップを目的とした勉強会の開催を実施することができた。
- ・「中学生ボランティア体験」を広く周知するために、校長会に対して掛け合い、依頼できる場を調整していった。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・子育てひろば・サロンを運営する方々の交流会では、日頃の活動の様子を共有したり、困りごとなどを話せる場になった。情報の共有から活動のヒントを持ち帰り、運営に役立てられたという声も聞けるようになっている。
- ・妊娠期から参加できる講座を土曜日に開催することで、パートナーと参加しやすくなった。また、子育て家庭や乳幼児と交流できる機会を設けたことで、育児と拠点利用のイメージを持てた。
- ・はっちボランティアに事業に参加してもらうことで、自身の特技を活かした役割を発揮してもらえるような取組が行えた。
- ・拠点近隣だけでなく、複数の中学校から職業体験の学生を受け入れるだけでなく、看護専門学校や大学生の実習も受け入れることで、若い世代が子育てについて考え、学ぶ場の提供ができた。

(課題)

- ・子育てグループの育成や支援の充実を図ることで、養育者が主体的に地域で繋がりがながら、子育てできる環境作りを支援していく必要がある。
- ・子育て家庭を見守る地域全体の雰囲気づくりを進められるよう、地域や世代を超えたより一層の取り組みを進めていく必要がある。

振り返りの視点

- ア 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- イ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- ウ 新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- エ 活動希望を丁寧を受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- オ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- カ 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。
- キ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- ク 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ケ これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	<ul style="list-style-type: none"> ・情報を共有したケースについて、継続して進捗状況を把握していく。 ・区職員が区民に対し、子育てサポートシステムを紹介した際に、必要なケースについては拠点へ引き継ぎを行う。 	A	A
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		A	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	A
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ) H24年10月移管

・H30年度利用者アンケート(拠点実施)・乳幼児健診アンケート(区実施)

問:子育てサポートシステムを知っていますか⇒知っている81%(拠点実施)、74%(区実施)

・会員数推移、入会説明会実施数、活動件数

年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	入会説明会(回数/参加人数)														活動件数(件)				
										全会員数(人)				入会説明会(回数/参加人数)						開催状況(回数)					参加状況			
										利用会員	提供会員	両方会員	集団	個別	出張	希望者宅	計	参加人数	登録人数	夫婦	登録率							
H24年度	330	264	52	14																					1378			
H25年度	406	326	53	27																					1213			
H26年度	480	377	65	38																					1405			
H27年度	539	414	90	35																					1530			
H28年度	603	470	100	33	11	97	14	111	15	38	12	12	1	1	25	12	15	1	53	283	148	(23組)	52%	1912				
H29年度	634	499	102	33					18	38					25	18	24	1	68	254	170				1767			
H30年度	705	558	113	34	13	66	16	178	21	48	17	18	10	11	29	17	21	10	78	299	184	23組	81%	2318				
H31年度	705	559	113	33	13	108	12	135	6	25	25	26	2	2	25	26	6	2	59	192	153	12組	85%	2319				
R2年度	680	547	109	24	15	55	9	29	11	26	56	59	3	3	24	56	11	3	94	170	137	13組	88%	1547				

1 周知の活動

- ・提供会員拡大に向け、区民利用施設・医療機関・商業施設・港南区子育て連絡会・駅PRボックスにチラシを配架した。
- ・地域のイベント、拠点の事業等で保護者に向けて提供会員を増やすための事業周知を行った。
- ・妊娠期から子サポを知ってもらうため、母子手帳交付時や沐浴・プチ体験参加者にチラシを配布した。
- ・小学校就学時健診・中学校入学式・放課後キッズクラブ、学童クラブの保護者に案内チラシを配布した。

2 養育者のニーズへの対応

- ・入会説明会は参加者の利便性を考え、平日と土曜日に設けたり、ケアプラザやつどいのひろばで開催した。
- ・ケアプラザ開催は遠方施設を選んで効果的な開催を増やす工夫をした。また個別対応も積極的に行った。
- ・養育者の事情などで来所が難しい場合には自宅へ出張し説明を行った。(H30年度 10件)
- ・お話し預かりを案内し初めて子どもを預けることへの不安解消に繋がった。
- ・保育付き講座を無料で実施しリフレッシュ利用の促進を図った。
- ・利用会員のニーズに応じて、隣接区等への登録・利用を案内した。
- ・入会申込書に必要な証明写真を区支部で撮影することによって入会説明会参加者の登録率が8割を超えた。

3 活動継続中の会員へのフォロー

- ・利用会員には依頼時に丁寧に聞き取りを行い、不安や疑問を取り除いた。
 - ・事前打合せには同席することを基本とし、活動がスムーズにできるように配慮した。
 - ・毎月の活動報告書で活動状況を把握し、活動の相違や困り感を感じた場合は、その都度提供会員と利用会員に連絡を取り、双方が安心して活動できるようにフォローした。
 - ・提供・両方会員向けの講座や交流会を開催し、日頃のサポートの様子を伺い、安心して活動を継続できるようにした。
 - ・初めての預かりや経験の少ない提供会員・両方会員には拠点ひろばでの預かりや交流会・保育付き講座・予定者研修会での預かりを案内し経験を積んでもらった。
 - ・「リフレッシュ利用促進講座」では、預かり経験の少ない提供会員にも、安心して活動してもらえた。
 - ・事前打合せ票(個人情報)を保管する専用ファイルをお渡しし、適正に取り扱うように注意喚起をした。
 - ・緊急救命講座を実施し提供会員・両方会員のフォローアップを行った。
- 4 養育者の立場に立った情報提供
- ・マッチングが困難な事例の際には、必要に応じて区内子育て資源や、民間サービスなどの情報提供をした。
 - ・子サポの対象とならない相談については、必要な情報提供ができるように子育てパートナーと連携した。
 - ・専門的な対応が必要と思われる利用会員については、区につなげ必要な支援が受けられるよう対応した。
 - ・利用会員からの依頼時にいねいな聞き取りを行い、内容によっては保育園の一時預かりや子育てタクシー等の選択肢も示した。

様式1-6 地域子育て支援拠点事業評価シート

評価の理由(区)

- ・広く事業を周知するために、母子手帳交付時の案内や、多くの区民が目にする区役所1階の広報ラックへ配架等を調整した。
- ・校長会にて事業の周知に向けた了解を得ることで、チラシを配布することができた。
- ・乳幼児健診、訪問などあらゆる機会を通じて、事業の周知を行った。
- ・定例会の場を活用し、利用者ニーズの共有や地域毎の効果的な周知方法等、事業がより発展するよう、検討を重ねている。
- ・定例会の場で、個別に支援が必要と思われる利用会員の情報共有を行った。その後区の地区担当職員に引き継ぐことで、タイムリーな子育て支援を展開できた。
- ・養育者が利用しやすいよう、個別説明会の周知をすることで、養育者のニーズの充足に繋げていくことができた。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・さまざまな周知の工夫(学校への働きかけや様々な場所でのチラシの配架等)と、利用者の希望に応じた柔軟な個別対応、説明会のアウトリーチ等を行ったことで、新規・継続利用につながった。
- ・利用会員のニーズに応じ、馴染みのある拠点での預りや保育付き講座を行った結果、子育てサポートシステム利用のきっかけづくりにつながった。
- ・専門的な対応が必要と思われる方については、タイムリーに区や関係機関へ報告することで、必要な支援につなげられた。
- ・多様化するニーズに対して、事前打合せだけでなく、その後のフォローアップを丁寧に行うことで、両会員が気持ちよく事業利用できるようコーディネートを行った。

(課題)

- ・多様化している養育者のニーズに対応できるよう、様々な取組をさらに検討していく必要がある。
- ・利用会員を適切な支援につなげるため、引き続き丁寧なニーズ把握に努めていく必要がある。
- ・提供会員・両方会員数の拡大に向けて、新たに小学校高学年保護者向けに配布するための工夫が必要である。
- ・専門的な対応が必要と思われる利用会員家庭に対して、提供会員がコーディネーターに相談しやすい環境と、各関係機関と連携できる仕組み作りを構築していく必要がある。

振り返りの視点

- ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
- イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
- ウ 養育者に対して、必要時に利用相談しやすく感じられるような周知活動等の工夫をしているか。
- エ 会員が相互の合意のもとに気持ちよく安全に活動できるよう、会員の状況に応じた活動方法の提案や、丁寧なコーディネートができているか。
- オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や会員のフォロー、追加のコーディネート等を行っているか。
- カ 提供・両方会員が活動の意義を感じながら、安心・安全な活動を継続して行えるよう、研修会等の取組がなされているか。
- キ 会員の活動意欲を高めるため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
- ク 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を促進する取組がなされているか。
- ケ 会員間で授受される個人情報を利用者が適正に取り扱うことが出来るよう、注意喚起や研修等の取組がなされているか。
- コ 援助活動の調整等を通して把握した子育てに関するニーズを、必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- サ 専門的対応が必要と考えられる相談について、こども家庭支援課との連携、連絡体制のもと、適切に対応しているか。
- シ 子育てサポートシステム以外の子育てに関する相談に対して、情報提供等の支援ができているか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	自己評価(A~D)	
	法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	A	B
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。	A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。	B	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)
【横浜子育てパートナー認知度】
 ・H30年度利用者(拠点実施)・乳幼児健診(区実施)アンケート
 横浜子育てパートナー認知度(知っている) (拠点実施)56% (区実施)27%
 ・知らないと回答:(拠点実施)H30年度 37% H29年度41%
【区民への周知活動】
 ・区内関連施設:48か所
 ・連絡会、定例会:年9回
【相談件数】
 ・H28年度 274件 (親自身29%・子どもの発育18%・就園・就学13%)
 ・H29年度 322件 (親自身19%・子どもの発育18%・就園・就学18%)
 ・H30年度 414件 (就園・就学21%・親自身20%・子どもの発育16%)
 ・R1年度 404件 (就園就学28%・親自身22%・子どもの発育20%)
 ・R2年度 334件 (親自身25%・子どもの生活19%・子どもの発育9%)
 ・パートナー認知度 知っている R1年55% R2年42% 聞いたことがある R2年22%
 知らない R1年37% R2年33%
【出張相談場所】
 地域ケアプラザ、親と子のつどいの広場、公園、お祭り、おもちゃ文庫
 ・H29年度:12ヶ所 ・H30年度:22か所 (R1年度予定:26ヶ所)

1. 区民への周知活動
 ・区内の関連施設・乳幼児健診等や区の事業でチラシやPR品(相談専用電話番号を載せたマグネットバーや携帯用絆創膏ケース)を配布し周知活動を行った。
 ・地域の子育て支援機関と連携できるように連絡会・定例会等に参加し、子育てパートナーの機能や役割を伝えた。
 ・はっちからのラブレターなど拠点の通信等で新パートナーの周知をした。

2. 養育者の主体性を尊重した相談
 ・継続支援が必要な養育者は、ひろば内でスタッフと連携して、日常の変化を見守った。
 ・養育者に寄り添いニーズに適した支援やサービスの情報を提供している。養育者の選択を尊重し、その後も継続的に声掛けするなどフォローした。
 ・専門的な相談が必要な養育者には、関係機関を紹介した。
 ・外国人、双子、ひとり親等の繋がり作りを目的に当事者交流を行った。また、養育者のニーズに合った講座を実施した。
 ・多様な相談に対応できるよう、子どもの発達・アレルギー講座等の研修会に参加し、スキルアップを図った。
 ・発達に不安を持つ養育者や双子の養育者とのひろばでの相談に親身になって対応した。
 ・電話相談の対応時、相談者の心が落ち着くまで丁寧に傾聴した。

3. 地域の社会資源との関係づくり
 ・地域の居場所に出向いたり、拠点事業の出張場所に同行することにより、拠点を利用していない親子の相談を受け、関係機関や気軽な相談としての支援につながった。
 ・就園についての相談ニーズに応えるため、区内全ての幼稚園に出向いて情報を収集し、拠点で情報提供した。
 ・「子育て情報お役立ちファイル」を作成し、区内の関連施設や子育てサロンに設置した。情報の更新の際には、施設の担当者と情報交換等を行った。
 ・港南台子育て連絡会に出向き、拠点もシールラリーのイベントに参加協力をした。

4. 子育て世代包括支援センター事業の取り組み
 ・産院へ拠点の通信や妊娠期の家庭へのイベントチラシを送り、拠点へ訪れるきっかけづくりをした。
 ・妊娠期の家庭が参加するイベントの際にはアンケートを取りニーズを抽出した。
 ・「はじめての沐浴体験」はニーズが高く令和3年度に開催回数を増やして対応した。
 ・「赤ちゃんとの生活プチ体験」は安心して子育てが始められることを目的に開催した。
 ・「プレママと0歳ママのおしゃべり会」を通じて、出産後に安心して利用へとつながるよう取り組んだ。
 ・妊娠期の家庭がイベントに参加することで拠点を知り、産後困ったときに相談できる場であることを知ってもらえた。
 ・沐浴体験が落選となった家庭には個別対応をして、今後の相談できる場として認知してもらった。
 ・区を通じて母子保健コーディネーターとの顔合わせや事業の取り組みを確認した。

評価の理由(区)

・こんにちは赤ちゃん訪問員定例会、赤ちゃん教室等の調整をすることで、事業の説明及び周知の機会を設けていった。
 ・相談内容や対応について、定例会の場で全件確認を行うことで、対応方法について共に検討することで、区の地区職員との役割分担ができ、スムーズなケース支援に活かすことができた。
 ・関係機関や地域の社会資源との関係作りがスムーズに行えるよう、助言・調整等の協力をした。
 ・子育てパートナーの交代に伴い、相談・対応のスキルアップが図られるよう、助言や研修の調整をしていった。
 ・子育て世代包括支援センターの実施に向けて、拠点と共に妊娠期から産後までの切れ目ない支援を実施していくために、母子保健コーディネーターとの意見交換できる場を調整していった。

様式1-7 地域子育て支援拠点事業評価シート

拠点事業としての成果と課題

(成果)

・「赤ちゃん教室」や「子育てひろば」、「つどいの広場」等に直接出向くことや、関係機関の協力を得ながら様々な方法で周知したことで、拠点利用者への子育てパートナーの認知が進んできた。

・養育者との継続的な関わりのなかで、相談者の表情が和らぐなど、相談を通して安心する様子が見られる。

・関係機関との連携がスムーズに行えるようになり、一体的な見守りができるようになってきた。

(課題)

・さらに認知度を上げるため、拠点・区とともに周知を工夫していく必要がある。

・利用者支援事業としての相談機能の更なる強化や、必要な時に必要な支援につないでいくために、拠点全体でしくみづくりを充実させていく必要がある。

・妊娠期の事業から見えてくる、妊娠期家庭のニーズ把握により一層努めていくことで、新たな事業展開や区との連携等につなげていく必要がある。

・妊娠期からの切れ目のないアプローチについて、母子保健コーディネーター等と連携した取組が必要。

・拠点を利用していない親子とつながるために、アウトリーチ方法を考えていく必要がある。

振り返りの視点

ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。

イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。

ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。

エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。

オ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介・支援依頼等について、相談者が円滑に利用できるような対応をしているか。

また、専門的な対応を要する相談については、内容に応じて速やかに関係機関に紹介・仲介する等、適切な対応を行っているか。

カ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら継続的な関わりをもっているか。

キ 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点から振り返りや検討を行っているか。

ク 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。

ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。

コ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実や、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整や提案につなげているか。

協働事業プロセス相互検証シート

1 事業計画段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・区の考えているニーズと実際に拠点での活動を通じて把握しているニーズのすり合わせを行い、共有することができた。
・互いの長所や強みを活かした子育て支援を今後も展開していく方向性を共有できた。
・毎年の役割分担を作成する際や、新たな事業を計画する際は、目標の確認や実施方法をすり合わせながら、すすめていくことができた。

【今後改善が必要と思われること】

・妊娠期の支援について、アンケート結果等を参考にしながら、ニーズの確認、支援のあるべき姿を検討し、区と連携した事業計画の作成をしていく必要がある。
・コロナ禍で延期や中止になる企画が相次いだり、未曾有の事態に対応できる正確な状況確認と拠点と区が協力して正しい判断をしていくことが重要と感じた。
・事業を区と計画していく上で、親子の居場所事業や相談事業の当日の様子を両者で確認する必要がある。
・オンライン化に伴い講座開催のみならず、相談事業等新たな事業への検討が必要。

2 事業実施段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・人材育成は広義の意味でとらえること(子育てサークル支援から始まり次世代育成まで)や、地域の子育て支援者、関係団体との連携の大切さを共有した。
・事業の目標を達成していくために、定例会などの機会を通して進捗状況等の確認をしながら、今後の実施方法について検討していくことが大切だと共有できた。
・新型コロナウイルス感染拡大防止のため事業の中止や再開について、共有しながら進めることで、目的を振り返る良い機会となった。

【今後改善が必要と思われること】

・事業を実施していく中で、今年度の事業目標をどこまでとしていくか等、見直しをもった検討をしていく必要がある。
・拠点が実施する事業の進捗状況の発信に留まらず、区内の子育てに関する情報が集約され、情報が得られやすい仕組み作りを、様々なツールを使用して行う必要がある。

3 事業の振り返り段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・妊娠期からの切れ目のない支援の必要性を共有した。
・様々な地域の方が参加しやすく、拠点を通じて、拠点以外の身近な居場所に繋がる機会づくりとなるよう、アウトリーチ活動の重要性を共有できた。

【今後改善が必要と思われること】

・事業の効果や課題の検証方法、目標の達成度についてを確認していく。
・子育て支援のニーズについての情報収集に努めていくとともに、子育て支援のあるべき姿の検討と取組を、区と拠点でより連携しすすめていく。
・事業毎に、様々な機関と連携した事業展開を実施していく必要がある。
・定例会の場を活用し、効率的に事業の振り返り等ができるような工夫が必要である。